RJP 独奏リコーダー
中級講座
テキスト

第２版

第3課

石田誠司　著

RJP

第3課　ヴァレンタイン　ソナタ　ヘ長調　Op．5-9(1回目)

イタリアで活躍したイギリス人　ロバート・ヴァレンタイン

ロバート・ヴァレンタイン（1671年ごろ～1747年）は、イギリス人なのに音楽先進国イタリアで成功しためずらしい音楽家です。当時のイギリスは「お金はあるが音楽家は不足」だったため、主にイタリアから音楽家を招いて不足を補っていたのですから、これは快挙だったことでしょう。

ヴァレンタインの修行時代のことはよくわかっていませんが、18世紀になるかならないかのころに、三十歳そこそこのヴァレンタインはトーマス・サムウェル卿の支援を得てイタリアに赴き、ローマを中心に、リコーダー奏者・オーボエ奏者として活躍しました。それとともに、主としてリコーダーのための作品集もローマやアムステルダムでたくさん出版し、それらの作品集はロンドンでも全て出版されていたという人気ぶりでした。また当時の愛好家が手書きで筆写した楽譜集で、ナポリの作曲家の作品ばかりを集めてある中にヴァレンタインのコンチェルトを１曲収めてあった例があり、このことから、ヴァレンタインはナポリでも何らかの活動を行ったことがあるのではないかと考えられています。

このようにイタリアで活躍したヴァレンタインは、イタリアに傾倒するあまりか（すっかり定住の意思を固めていたゆえか）イタリアふうに「ロベルト・ヴァレンティーニ」と名乗っていました。しかし、イギリス人としての誇りを失っていなかったようで、彼がローマなどで出版した楽譜では名前の後に Inglese（英国人）と付記してありました。

以前は帰国して1735年ごろ亡くなったと考えられていましたが、最近の研究では1747年ごろにローマで亡くなったということです。

ソナタ　ヘ長調　作品5-9

ヴァレンタインは、作品2や作品3のソナタ集までは比較的普通に書いていましたが、今回取り上げるソナタが属する「作品5」あたりから、遅い楽章には装飾的な音をたくさん書き込むようになります。いわば、そのまま演奏すれば華麗に装飾をつけ加えて演奏されたように響く楽譜を書くようになったのです。

彼が書く装飾は速い音階的な音型が多く用いられていて、やや癖が強いものですが、イタリア的な装飾技法の一端を伺い知ることができます。

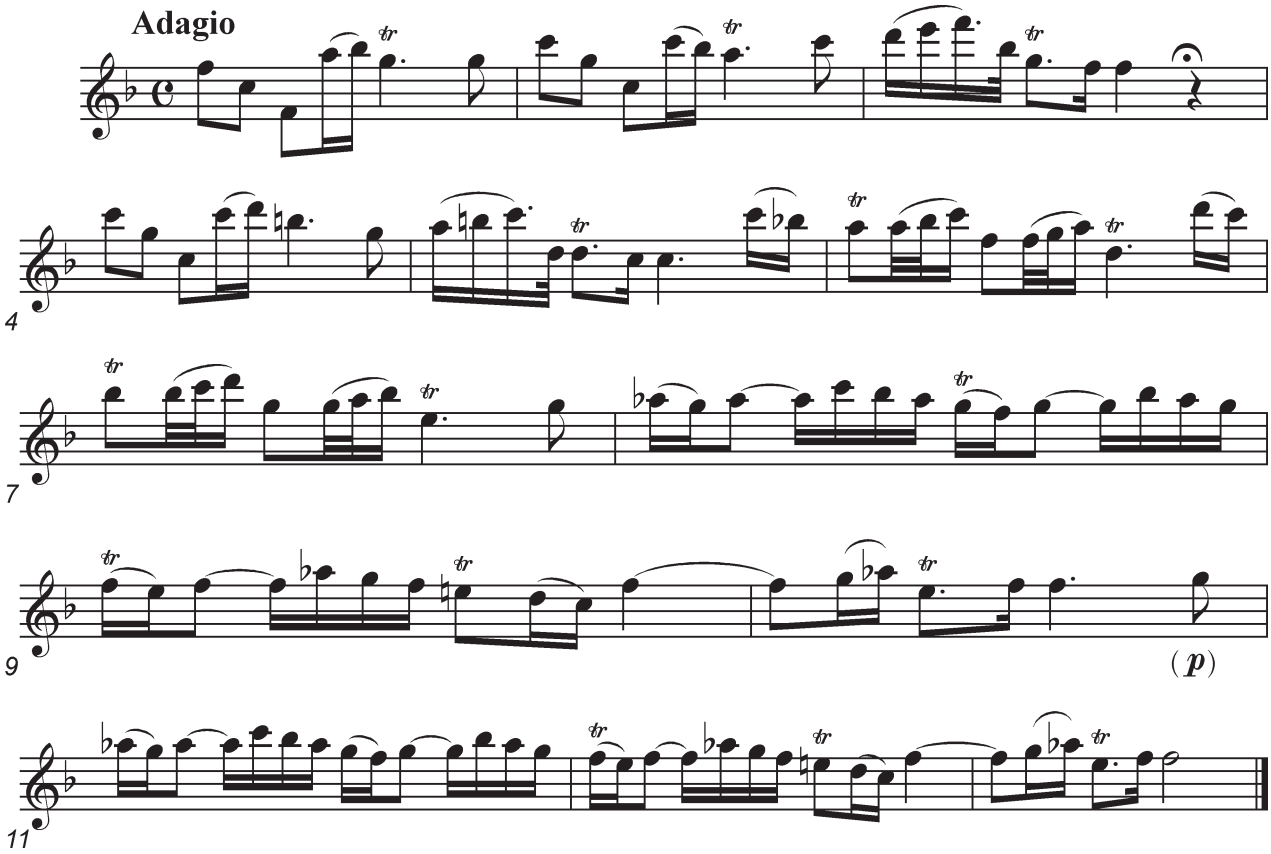
また、速い楽章での陽気で軽妙な調子も独特のもので、現代の音楽に通じるようなリズミカルな楽しさはヴァレンタインならではの特長です。

作品5-9は全体に軽い調子の作品で、愛すべき小品、といったおもむきです。

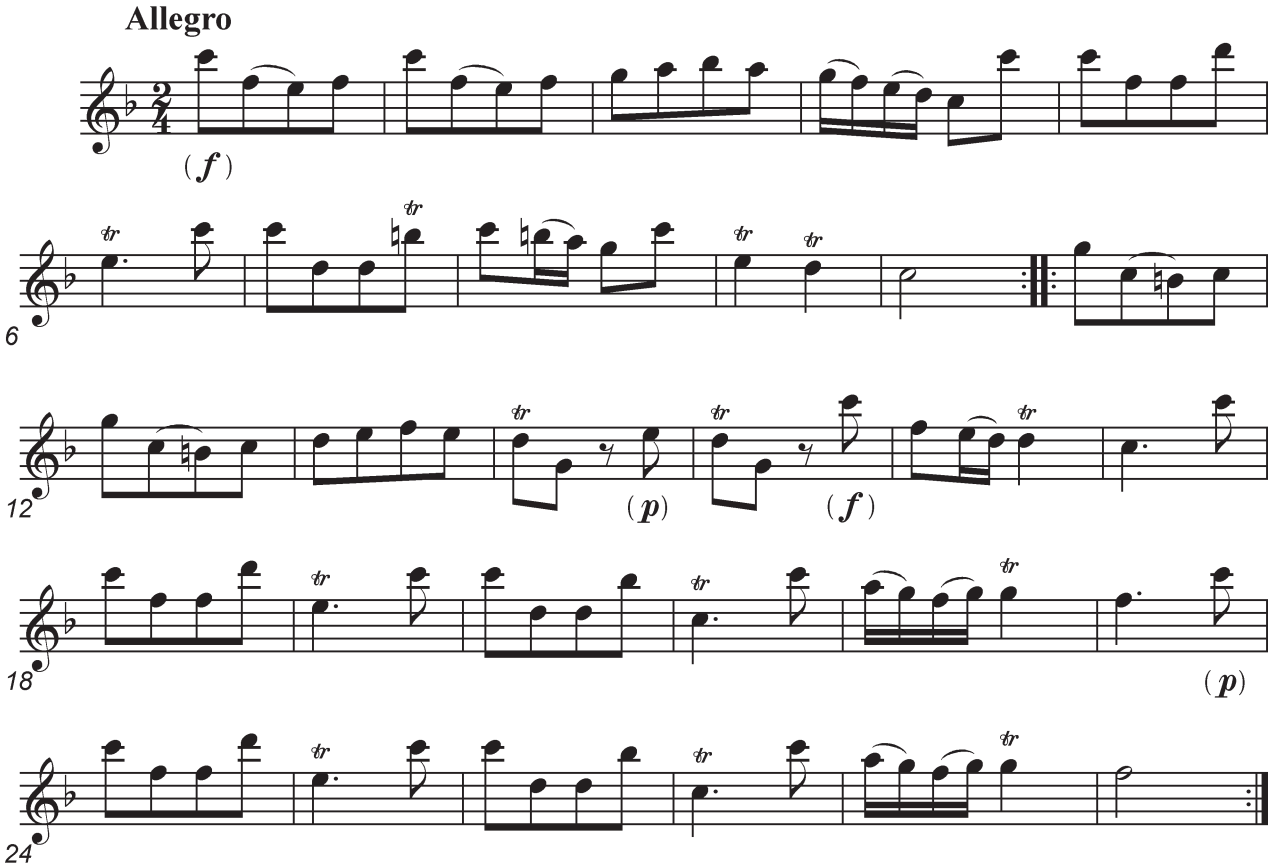
◆ソナタ　ヘ長調　作品５-９◆

Robert Valentine (1715 a.c.)

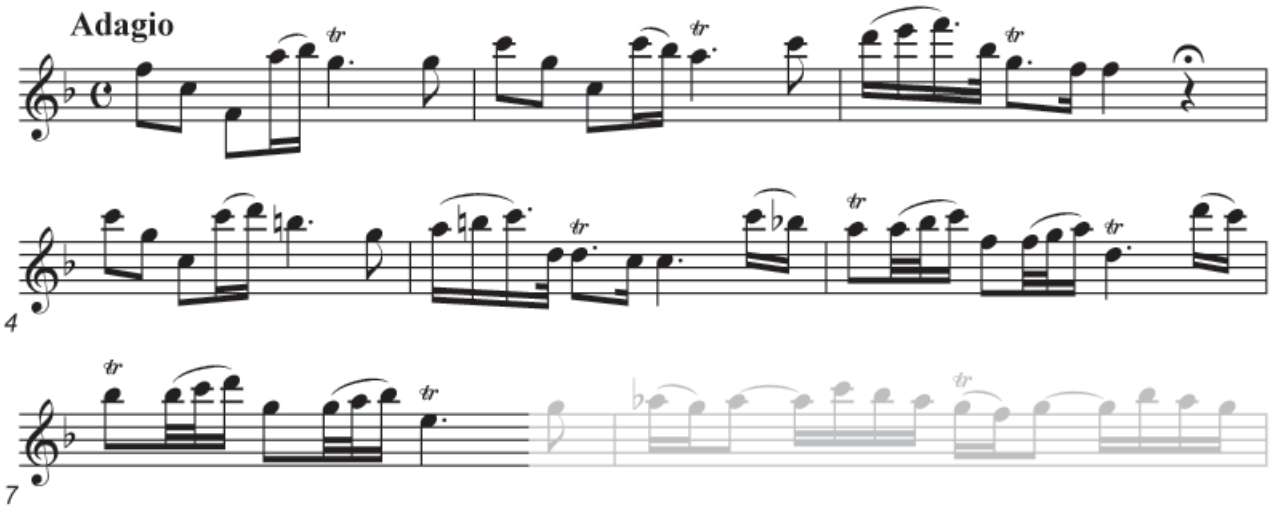
第１楽章



第２楽章



第１楽章　第１部分(１～７小節)



講義（ビデオの解説）では第１楽章をまとめて解説していますが、テキストでは、便宜的に大きく２つに分けてみます。（曲の内容から見れば適切な分け場所ではなさそうですが。）

Adagioという指定ですので「ゆっくりと」演奏しますが、この曲の場合は、実際には中庸テンポ（四分音符＝80/分ぐらい）よりも、ややゆったり目という程度かと思います。

主音「ファ」から４度下降→５度下降と進み、次には最初の音より高い「高いラ」音まで跳躍し、そしてトリルのつけられた付点四分音符で一息つく、という特徴的なモチーフで始まります。このモチーフはすこし２声の気配があり、いわば「ファ（ド、低いファ）ラシソーー」という進行の、いま確固に入れた２つの音は伴奏声部のような性格も少し持っているかも知れません。

１小節にある「ソ」のトリルは、ゆったりした曲ですから、あまり音の変わり目のきつくならないトリル（[123467]/[1234567]）のほうがいいでしょう。ぜひ「高いほうの音＝高いラ」から開始してください。そして、最後にしばらく「ソ」を聴かせたいわけですが、そのときには正規指づかいのソにするほうが音色が明るくてよいでしょう。そこで、少し複雑な指づかいですが、

[123467]→[1234567]→[123467]→・・・・・→[1234567]→[123467]→[2]

という順を練習してみてください。

２小節目もこのモチーフを少し高い音域で（わずかな違いはありますが）繰り返します。「高いラ」のトリルは、「高いシ♭」と「高いラ」の交替です。指づかいは、正規の「高いシ♭」から開始し、正規の「高いラ」に移り、できればさらにもう１度ぐらい「正規の高いシ♭」「正規の高いラ」を挟み、あとは5指（右手中指）の開閉です。

そして、３小節では早くも終止カデンツをなすモチーフに入って、いったんフレーズをし

めくくります。四分休符にフェルマータが書かれていますが、これは単に少し長めに休もうということではなくて、たぶん少しアドリブを奏してから、通奏低音に合図をして息を揃えて４小節に入るような音楽が意図されているのでしょう。

※　本講座の模範演奏や伴奏では、やむなく、「軽くフェルマータ」（＝少だけ時間を長めにする）という形で演奏しています。

さて4小節からはいきなりハ長調に転じて、簡略化した形でテーマをもう一度奏します。この小節の、付点四分音符による「高いシ」は、１小節や２小節の場合を踏襲するなら、トリルを補ってみるべきかも知れません。

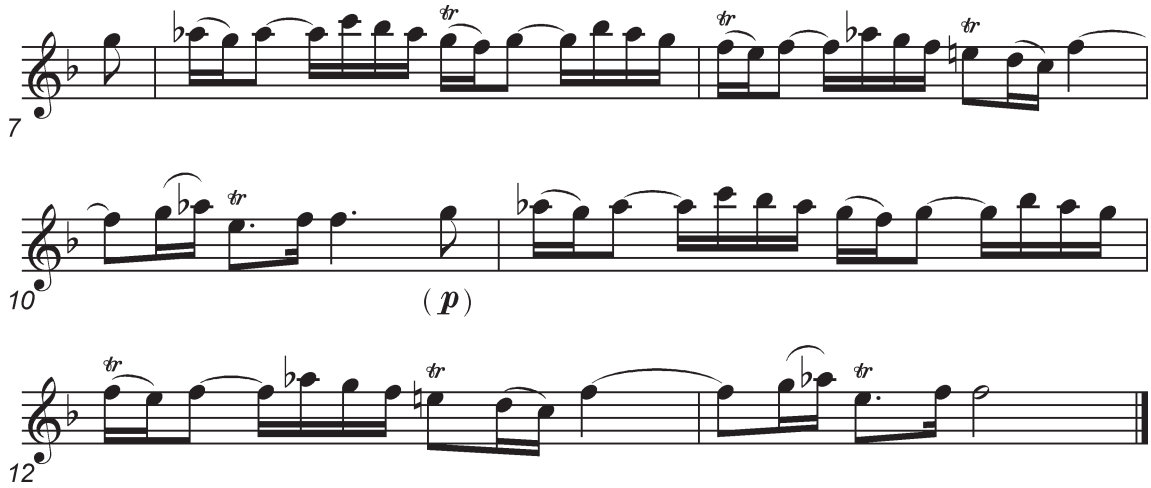
続いて、5小節の４拍目裏拍から新しいモチーフが持ち出されます。これは最初のテーマよりも動きのある性格のものです。

6小節の最初にある「高いラ」にトリルですが、これは短い音符なので、「正規の高いシ♭」→「正規の高いラ」 のあとは、すぐに5指を１度開閉するぐらいでよいでしょう。

7小節の最初の「高いシ♭」のトリルは、「高いド」から開始し「正規の高いシ♭」、そのあと4指（右手人差し指）の開閉で演奏してください。6指（右手薬指）も開くほうが音程はよいのですが、複数指を開閉するトリルはぼやけやすいのです。

7小節3拍目からの付点四分音符「ミ」のトリルはどうしましょうか。ここはヘ長調ですから、正規のファ[02]と、替え指 [023]を用いて、主音「ファ」の音程を正しくするのが著者のお勧めです。しかし、 [02]→[01]のあと、1指（左手人差し指）を開閉する「バロック的なトリル」のほうが一般的ですから、そちらを用いてもかまいません。

第２部分(7 ～13 小節)



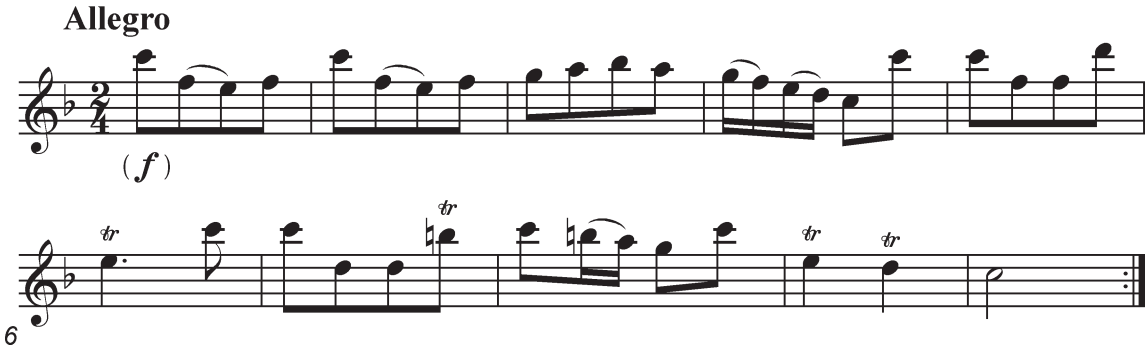
さて、8小節からは短調（へ短調）に入ります。憂いを帯びた美しい下行のゼクエンツのあと、終止カデンツでまとめますが、ほぼまるまる同じことをもう１度演奏して楽章をしめくくります。

注意したいのは8小節に出てくる「ソ」のトリルです。これは「高いラ♭」と「ソ」の交代で、「高いラ♭」から開始しますが、正規指づかいできれい演奏するのは難しいので、トリル用の指づかいを用いましょう。 ふつうの「高いラ♭」の指づかいは [23456]ですが、そこから２指（左手中指）も開けた [3456]でも「高いラ♭」が鳴りますので、その指づかいで5指（右手中指）を開閉します。なんだかバランスの悪い指づかいですが、やむを得ません。上から開始して２回で良いでしょう。

そして、そこからスラーで「ファ」に進むわけですが、このときの指づかいが、かなりやり辛いクロスフィンガリングですので、よく練習してください。

11小節からの「２回目」は、１回目よりも弱く演奏する「エコー」にしたいのですが、全体に音程が下がってしまいますから、あまり極端なことはできないでしょう。「気持ち程度」にとどめるしかありません。

第２楽章　第１部分(1～10 小節)



第２楽章はヴァレンタインが得意とした「ゴキゲン」な感じの音楽です。もしかすると、ものすごく達者なチェンバリストと組んで、非常に快速に演奏したのかも知れませんが、本講座ではそんなに無茶なテンポは選んでいません。

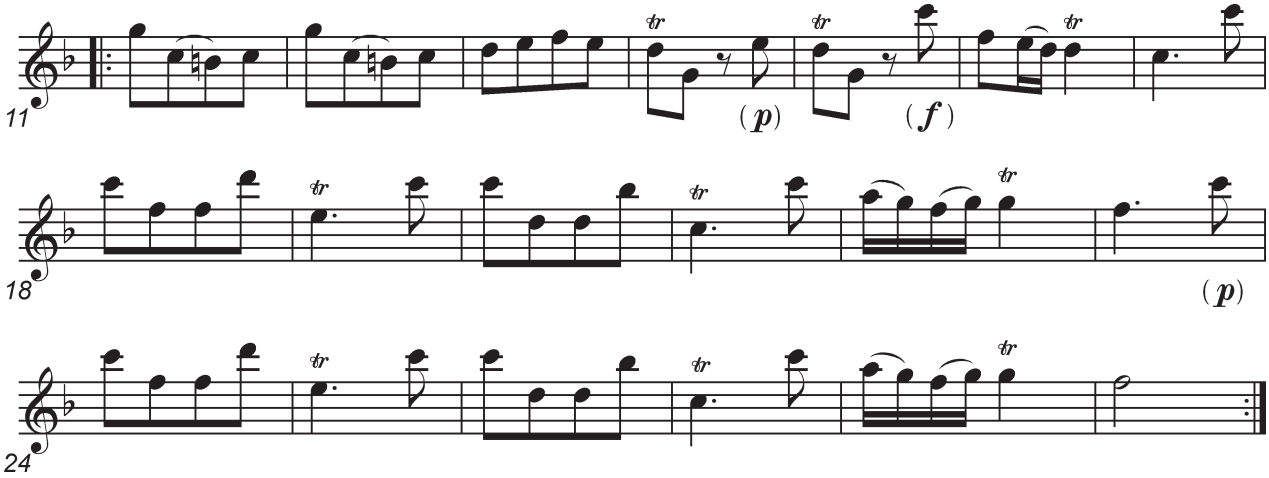
決然とした感じのモチーフで始まりますが、これは、どちらかというと「開始の合図のファンファーレ」のような趣がありますので、「序的主題」とでも呼んでおきましょう（大層な命名ですが)。すると、5小節から開始される、現代のブギウギか何かを思わせるようなうきうきするノリの音楽のほうが主題ということになりますが、なんともはやくつろいだ感じの主題です。7小節でサッとハ長調に入り、ハ長調の終止カデンツでさっそうと前半をしめくくっています。

トリルはすべて原譜にあるものですから作曲者の指定だと思われます。

長めの音符（四分音符、付点四分音符）のトリルはすべて「上から」の感じでしょう。6小節の「ミ」のトリルは、ここはまだヘ長調ですので、主音「ファ」の音程を重視したトリル（替え指 [023] を用いるトリル）を推奨しますが、対して、9小節の「ミ」は、ここはすでにハ長調に転じていますから、ふつうに「バロック的なトリル（[02]→[01]から1の開閉)が派手で良いと思います。

7小節にある８分音符の「高いシ」のトリルは、上から「ドシドシー」ぐらいが気持ち良さそうですが、プルラートリルで「シドシー」でもそんなに悪くはなさそうです。いずれにせよ、八分音符にトリルを行って効果を上げられるテンポを選ぶとすれば、そうむちゃくちゃに速いテンポというわけには行かなくなります。

第２部分(11 ～30 小節)



後半は、序的主題を今度はハ長調で奏することから始まりますが、そのあとに主題がすぐに続くのではなく、軽く問いかけて、それにまた自分で答えるような、しゃれたモチーフに続いています（14～15小節)。これが、いかにもエコー処理にピッタリな感じを持っていますので、強弱をつけてみましょう。

そしてその後（16小節アウフタクトの八分音符)からは「いきなりフォルテ」に戻るのが印象鮮やかです。

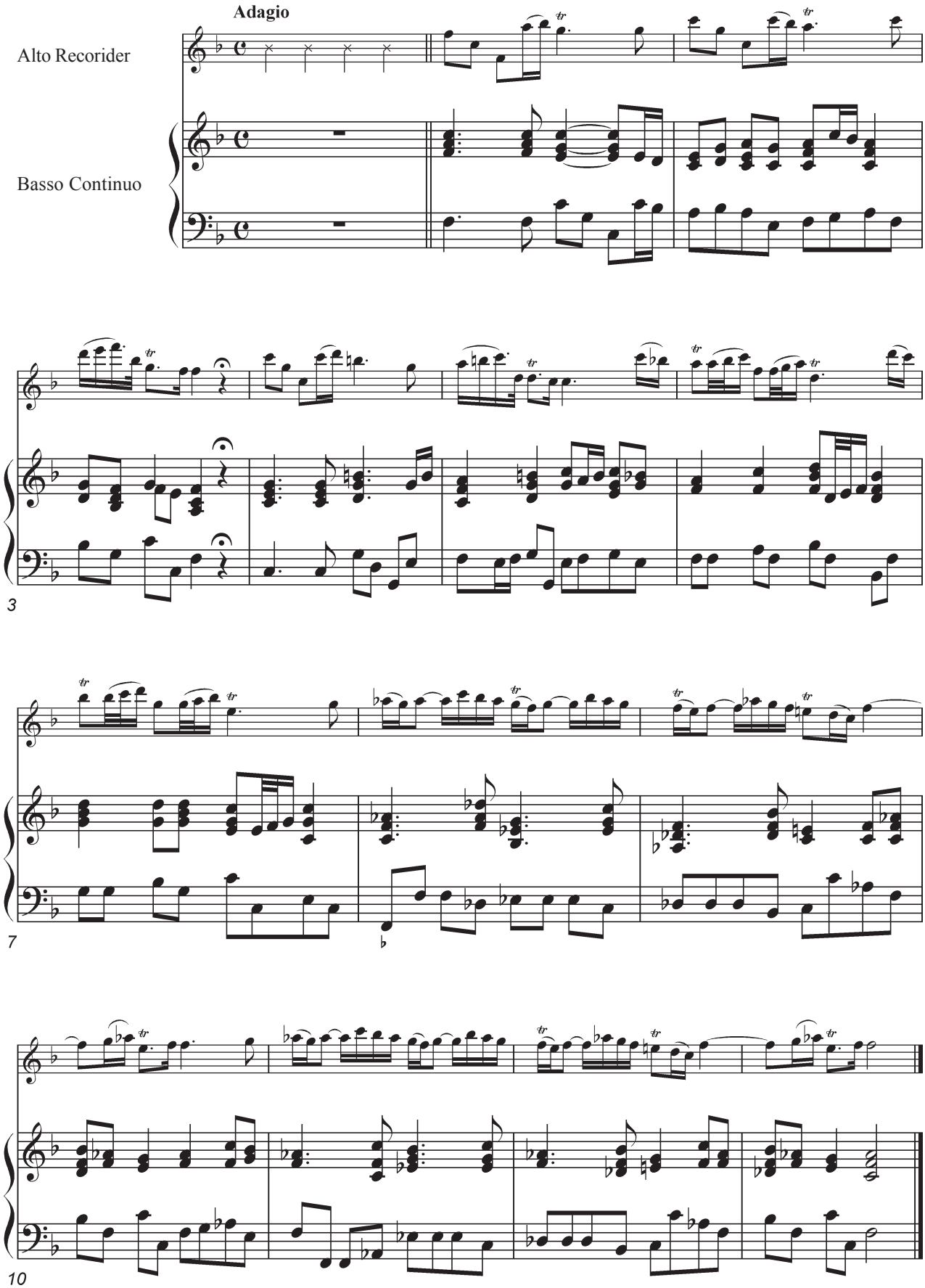
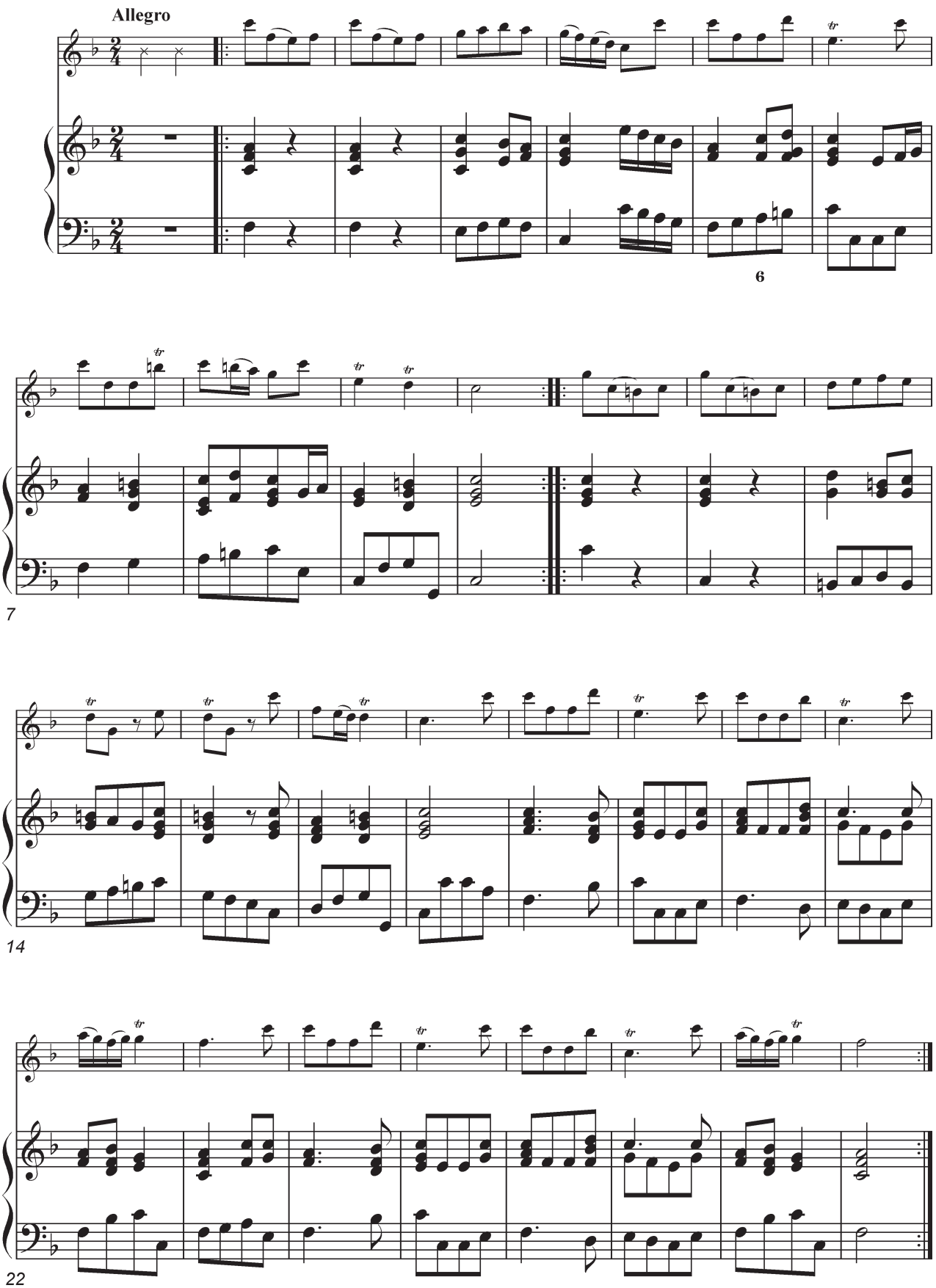
18小節から、遅ればせながらテーマが現れますが、これが同時に早くも収束の開始です。しかも、テーマが始まってから6小節目で終止カデンツでまとめてしまうという手っ取り早さ。そして、第１楽章と同じく、またこの収束部がもう一度繰り返されますので、ここもエコーに処理してみましょう。

良く言えば簡潔にまとめられた、悪く言えばいかにも軽い感じの楽章ですが、その「軽さ」も含め、全体の陽気でくつろいだ気分はヴァレンタインの独壇場だと思います。たまにはこういう気楽な感じの曲をさらりと演奏するのも、悪くはありません。

◆ソナタ　ヘ長調　作品５-９◆

Robert Valentine (1715 a.c.)
通奏低音実施　高橋たかね

第１楽章



第２楽章